

## コロケーション収集の方法

今井 新悟  
筑波大学人文社会系

キーワード：コロケーション 慣用句 コーパス

### 1. コロケーションと慣用句の種類

コロケーションは例えば『大辞林（第三版）』では、「文や句における、二つ以上の単語の慣用的なつながり方。連語関係。」と定義されている。語と語は比較的自由に組み合わせることができる。例えば、「雨が踊る」「石が走る」（山の斜面を石が転がり落ちる場面など）とすることができる。ただし、これらは文法的には正しい組み合わせではあるが、一般に使われることはまれであり、慣用的でない。その意味の理解には相当の文脈や詩的な解釈が必要となる。コロケーションを最も緩やかに定義すれば、慣用化していない語のつながりも含めて「語と語が共に出現している」ものすべてと見ることもできる（Sinclair 1991）が、本稿では、「慣用化した実質語のつながり」をコロケーションとみなす。

実質語のつながりをコロケーションと見なし、実質語と機能語のつながりは含まないものとする。「名詞＋を＋動詞」は「単語」としての「名詞」「動詞」の他に助詞の「を」が間に入っている。この場合、機能語である助詞が二つの単語を結びつけている。「名詞＋を＋動詞」がコロケーションの単位となり、「名詞＋を」や「を＋動詞」はコロケーションではない。「にとっては」のような機能語同士の結びつきもコロケーションとはみなさない。「赤い火」のような「形容詞＋名詞」、「ゆっくり走る」のような「副詞＋動詞」も実質語同士の結びつきなのでコロケーションである。動詞をキーワードとして、それにどのような名詞が共起するかを見る場合、動詞が中心語(node)、名詞が共起語(collocate)である。逆に、名詞を中心として、それにどのような動詞が共起するかを見る場合は、名詞が中心語(node)、動詞が共起語(collocate)と呼ばれる。名詞を中心としてそれを修飾する形容詞の共起を見る場合は、名詞が中心語、形容詞が共起語である。

慣用化の度合いは連続している。(1)、(2)で、左から右に慣用の度合いが高まる。「油を売る」には慣用句としての意味と慣用句ではない「油を販売する」の意味の両方がある。）

- (1) 油を見る<油を見つける<油を掘る<油を販売する<油を売る（慣用句として）
- (2) 人が走る<山脈が走る<目を走らせる<筆が走る<虫唾が走る<油を売る

便宜上、以下ではコロケーションを区分・分類するが、慣用の度合いは本質的には連続しているもので、その区分・分類はあくまでも便宜的であり、恣意性を免れないことに注

意しておきたい。

慣用化していない単語のつながりは、単純共起と呼ぶこととする。石川（2008）では、*is a pen* のように文法的なまとまりをもたないものを単純共起としているが、本稿では、文法的なまとまりがあっても、慣用性がないものを単純共起と呼ぶ。例えば、「石が走る」「雨が踊る」「本を下げる」などであるが、これらの共起は偶然的であり、いわゆる選択制限に違反している場合であって、文脈の支え、あるいは詩などにおける創造的な意味でなければ解釈が困難である。

「人が走る」「パンを食べる」などを「自由コロケーション」と呼ぶ。「自由」ではあるが、選択制限には従っている。選択制限に従わない場合は、単純共起になる。「人が走る」の「走る」の意味はその最も基本的な「人・動物が足を速く動かして進む」や「乗り物が速く進む」の意味である。「人」の代わりに、人や動物や乗り物に関するあらゆる語で置き換え可能である。他に自由コロケーションの例としては、「電車が走る」「授業が始まる」「パンを食べる」「本を読む」などがある。「雨が降る」「風が吹く」「ご飯を炊く」などでは、置き換えできる語が限られてくるので、慣用の度合いがその分高くなる。しかし、これらは依然、その構成要素である名詞、動詞は基本的な意味で使われているため、自由コロケーションである。

「山脈が走る」（「走っている」の形で使われる）の「走る」では基本的な意味である「人・動物が足を速く動かして進む」や「乗り物が速く進む」に見られる移動の意味から「線状のものが連なっている」という比喩的な意味にずれている一方、名詞「山脈」は比喩的な意味にはなっておらず、基本的な意味で使われている。「山脈」に置き換えられるのは「道、鉄道、断層、亀裂」などの線状のものであり、制限が強くなる。構成要素の一部が基本的な意味からずれて、比喩的な意味になっており、語の組み合わせに制限が生じるものを「制限コロケーション」と呼ぶ。他に制限コロケーションの例としては「痛みが走る」「稲妻が走る」がある。

「目を走らせる」も制限コロケーションであるが、「山脈が走る」よりもさらに共起制限が厳しく、「目」の代りになる語は「視線」に限られる。NINJAL-LWP for Tsukuba Web Corpus（以下、NLT）で調べると「横目を走らせる」という実例が見つかるが、容認度は低い。「目を走らせる」は「目を速く移動させる」という意味とともにメトニミーとして「読む」という意味をも持つ。この点でも、「山脈が走る」よりも慣用の度合いが高い。

「筆が走る」は比喩的慣用句である<sup>1)</sup>。「筆」は筆を含む筆記用具を指すシネクドキになっている。筆を速く移動させることによる結果もたらされる原稿などの書かれたものの生成が速いという意味になる。「筆を動かす」結果としての生産物を指しているので、メトニミーになっている。「筆」を「ペン」に置き換えることも可能であるが、さらに「鉛筆、万年筆」などに換えると、筆と筆記用具の間に見られたシネクドキの関係は失われ、「鉛筆」で他の筆記用具を意味することはできなくなる。

比喩的慣用句では、構成要素の組み合わせから、直接意味を類推することはできないが、

構成要素あるいはその組み合わせである句の比喩は分かりやすいものであり、その比喩が分かれば、句の意味が理解できる。比喩的慣用句の例としては、他に「手を広げる」「足を伸ばす」「目をつぶる」などがある。これらは字義通りに取れば自由コロケーションであるが、それぞれ、「事業などを拡大する」「遠出する」「黙認する」の意味で取れば比喩的慣用句である。これらの例では、実際の動作と比喩的な意味はメタファーの関係になっている。比喩的慣用句の場合、語と語の結びつきが強く、語の入れ替えができない。例えば「手」を「両手」や「腕」に換えると、字義通りの意味しか持たなくなる。「顔が曇る」も比喩的慣用句である。

最も慣用化が進んだものは「真正慣用句」と呼ばれる。「油を売る」(＝無駄話をして無駄に時間を過ごす)、「泡を食う」(慌てうろたえる)、「虫唾が走る」、「腹が立つ」、「しらを切る」は「真正慣用句」である。その構成要素から意味を類推することも、また、構成要素の意味と真正慣用句の意味の間の比喩的關係を理解することもできない。「油を売る」を字義通れば‘sell oil’である。この場合は、「油」と「売る」の構成要素から意味が分かるので、慣用句ではない。このように、同じ語の組み合わせが真正慣用句と自由コロケーションのいずれにもなる場合がある。

真正慣用句は語と語の結びつきが強く、共起語を他の語で置き換えることができない。例えば、「水を売る」「薪を売る」などで「油を売る」と同じ意味を表すことはできない。「虫唾」は「走る」以外の動詞を取ることができず、「しら」は「切る」以外の動詞を取ることができない。また、「油を売る」や「しらを切る」の間には他の語を挿入することはできない。「長時間油を売る／\*油を長時間売る」「平気でしらを切る／\*しらを平気で切る」これに対して、「虫唾が一瞬走った。」「腹がものすごく立った」のように語の挿入が可能である。他の語が挿入できないというのは、語の結びつきの強さを表しており、この点では、「虫唾が走る」と「腹が立つ」の慣用の度合いは「油を売る」「しらを切る」に比べて、やや下がる。なお、比喩的慣用句では、いずれでも語の挿入は可能である。「手をあまり広げすぎるといけない。」「足を遠くまで伸ばした。」「筆がよく走った。」真正慣用句も語源を遡れば、比喩的慣用句であり、源を知っている者にとっては、比喩的慣用句として捉えられるが、一般には、その比喩的語源は分からなくなっているものである。なお、「虫唾が走る」の「走る」には「悪寒が走る、激痛が走る」と同様、「瞬間的に伝わる」という意味が残っている点で、幾分慣用の度合いは下がる。また、「腹が立つ」は「腹を立てる」のように自他の交替が可能である点でも、慣用の度合いが下がる。

単純共起から真正慣用句まで慣用化の度合いは段階的に連続している。表1に単純共起から真正慣用句(後述)までの例を示す。

表1 コロケーションの種類

単純共起	石が走る	雨が踊る	本を下げる
自由コロケーション	人が走る 雨が降る	パンを食べる 風が吹く	本を読む ご飯を炊く
制限コロケーション	山脈が走る 目を走らせる	稲妻が走る	
比喩的慣用句	手を広げる 筆が走る	足を伸ばす	目をつぶる
真正慣用句	虫唾が走る 油を売る	腹が立つ しらを切る	

以上のように自由コロケーションから真正慣用句まで一応の分類はできても、その内部にまた慣用の度合いの強弱があり、慣用の度合いは連続している。本稿では、広義のコロケーションには自由コロケーションから真正慣用句までを含み、単純共起は含まない。狭義のコロケーションには自由コロケーションと制限コロケーションを含む。以下、特に断りなく「コロケーション」とした場合は狭義のコロケーションを指す。

## 2. コロケーションの収集方法

中級以上の日本語学習者を対象とした、コロケーション辞書を作成することを目的に、NLT を使ってコロケーションの収集を行っている。NLT は、ウェブから収集した約 11 億語のコーパスの検索ツールである。頻度を中心として、MI (Mutual Information) スコア、LD (Log Dice) 係数の値を参考にしてコロケーションを収集する。コロケーションの度合い、つまり慣用の度合いを表す指標にはいくつかあるが、ここでは、NLT で示される頻度、MI スコア、LD 係数について見る。

頻度の高いものは、共起して用いられることが多いということであるから、慣用化した語の結びつきを示している。一般に慣用句よりも頻度の高い(狭義の)コロケーションである自由コロケーションおよび制限コロケーションを見つけるのに適している。NLT で動詞「走る」と共起するガ格名詞の高頻度順に上位 10 位を並べると、「車、痛み、激痛、電車、バス、【一般】、列車、衝撃、人、緊張」となる。このうち、「車、電車、バス、列車、人」が自由コロケーションの共起語、「痛み、激痛、衝撃、緊張」が制限コロケーションの共起語である。高頻度のコロケーションの場合、制限コロケーションよりも自由コロケー

ションの方が多くなる傾向があるが、その差はさほど大きくはない。【一般】には色々な固有名詞や未知語が含まれるので、実際のコロケーションの記述の際には省く。

MI スコアは語と語の特殊な結びつきの度合いを示す。真正慣用句「虫唾が走る」(NLT では「虫ず」と表記)のように、「虫唾」と結びつく動詞は「走る」以外にないという場合にスコアが高くなる。NLT における「虫唾が走る」の MI スコアは 16.05 となっており、「名詞+が+走る」では一番高い。一方「油を売る」も真正慣用句であるが、この MI のスコアは 6.32 まで下がり、「パンを売る」と同程度である。「油を」と結びつく動詞は「売る」以外に「使う、注ぐ、塗る」のようにいくつもあるため、MI スコアが比較的低くなる。このように MI スコアは慣用句の中でも語の結びつきが特殊で他の組み合わせがないような慣用句を見つけ出す指標として有効である。なお、その語の頻度がもともと極端に低い場合には MI スコアが極端に高くなってしまうので、MI スコアを参照するのは、ある程度頻度のあるものに限られる。

LD は頻度と MI スコアの中間的な安定した指標となる。頻度がある程度あって、結びつきがやや特殊で制限がある場合に高い値を示すので、制限コロケーションを見つけるのに適している。例えば、「名詞+が+走る」で、LD が高い順に 10 を並べると「激痛が走る、電車が走る、列車が走る、衝撃が走る、痛みが走る、亀裂が走る、緊張が走る、激震が走る、閃光が走る、稲妻が走る」となり、これらのうち「電車、列車」の 2 語が自由コロケーションであり、他 8 語が制限コロケーションである。頻度で上位 10 位を並べると「車、痛み、激痛、電車、バス、列車、衝撃、人、緊張、～線」となり、「車、電車、バス、列車、人」の 5 語が自由コロケーション、他 5 語が制限コロケーションとなり、自由コロケーションの占める割合が高くなる。次に、LD の上位 20 位までとの比較のため、頻度の上位 20 位を示す。なお、共起語はカテゴリごとに分けてしめす。LD 上位 20 位では、やはり、制限コロケーションである「激痛、衝撃、亀裂、閃光、悪寒」などが多くなっている。さらに、「虫唾が走る」という慣用句が現れている。自由コロケーションは「電車」などの乗り物が 8 つである。「走る」の最も基本的な意味を構成する人・動物カテゴリの共起語はない。頻度上位 20 位を見ると、制限コロケーションも大分現れてくるが、自由コロケーションの数の方がやや優勢であり、乗り物カテゴリ、人・動物カテゴリともに現れており、高頻度の共起語は自由コロケーションとして現れる傾向が依然として見てとれる。

表 2 LD 上位 20 位

激痛、痛み  
電車、列車、バス、汽車、トラック、市電、車、自転車  
衝撃、緊張、激震、動揺  
亀裂  
閃光、稲妻

悪寒、戦慄  
虫ず

表3 頻度上位 20 位

車、電車、バス、列車、自転車、自動車  
痛み、激痛  
衝撃、緊張  
人、【人名】、私、自分  
線  
道路、鉄道  
ウマ  
電気

さらに頻度、LD ともに上位 100 位までを取ると表 4 になる。下線なしの語は頻度で拾えたもの、下線のある語は頻度では拾えなかったが LD の上位 100 位までで拾えた語であることを示している。なお、形式名詞や【一般】【人名】のように異なる固有名詞や未知語が一緒になったものは除いてある。共起語はカテゴリに分け、各カテゴリにはラベルを付してある。「バス」のように「乗り物」「路線」のように複数のカテゴリに分類し得るものはそれぞれのカテゴリに重複して記載している。ここでのラベルは共起語を列挙するあたり、仮に付けたものであり、実際にコロケーション辞典として記載する場合には整理・調整が更に必要となるだろう。

表4 頻度及び LD 上位 100 位

人・組織： 人、私、自分、たち、さん、子供、選手、者、僕、ランナー、達、皆、人間、全員、男、あなた、ら、子、人々、彼、ちゃん、自身、企業、伝令

動物： ウマ、馬、頭、犬

乗り物： 車、電車、バス、列車、自転車、自動車、車両、トラック、船、汽車、地下鉄、市電、新幹線、バイク、系、タクシー、カー、特急、号、SL、都電、馬車、モノレール、トロッコ、パトカー、戦車、ダンプ

線： 線、ライン、筋、電線、葉脈

道・線路： 道路、鉄道、道、新幹線、号線、線路、国道、路線、街道、～線、～ライン、林道

路線： 地下鉄、新幹線、市電、都電、バス、モノレール、トロリーバス

亀裂：	亀裂、溝、断層、 <u>水路、運河、割れ目</u>
線状地形：	山脈、～帯、断層
線状器官：	神経、血管、 <u>繊維</u>
感覚：	～感、悪寒、戦慄、痺れ、寒気、感覚、電気、電流、予感、 <u>震え、電撃、鈍痛、快感</u>
痛み：	痛み、激痛、
衝撃：	衝撃、激震、緊張、動揺
光：	光、閃光、稲妻、 <u>稲光、ノイズ</u>
虫唾：	虫ず、(虫)唾、
道具：	(ゴルフクラブの) ヘッド、 <u>筆、球</u>

動詞「走る」との共起語については頻度、LD のそれぞれ上位 100 位までと MI の上位のものを見れば、概ね拾うことができる。しかし、そのいずれにも該当しないが、なお共起語として採録すべきものがある可能性は常に残るので、上位 100 位以下のものについてもチェックしておく必要がある。どの程度の頻度、LD までチェックするべきかということは一概には決まらない。例えば「走る」に対して「駆ける」は共起語の総数が相当少ない。こういう語の場合には、チェックするべき頻度、LD の閾値も低く設定する必要がある。

### 3. 記述例

#### 3. 1 動詞が中心語である例

以下に動詞「会う」を中心語とするコロケーションの記述例を示す。

表5 「会う」の記述例

## 会う

名詞+助詞

○N1 が N2 に / と会う

N1 人：私、人、あなた、彼、自分、僕、子供、彼女、親、妻、夫、相手、おれ、両親、社長、大臣

N2 人：人、先生、子供、友達、両親、みなさん、友人、女性、母、相手、家族、親、本人、

○N が会う

人々：～たち、～同士、我々、家族、二人、お互い、みなさん、男女、親子、夫婦、両者

○N で会う

場所：～の中、ここ、～ところ、会場、外、途中、道、～場所、～前、駅、街、学校、

会社、現地、学会、近く  
人数：～人、～人きり、ふたり、ひとり、皆  
理由：仕事、～の紹介、取材、  
状況：～こんな／～の形、状態、内緒、プライベート、  
○N から会う  
自分：自分、こちら、～のほう、私

#### 名詞＋複合助詞

○N として会う  
人（関係）：友達、友人、人、人間、母親、個人

#### ＋名詞

○会う N  
機会：機会、予定、チャンス、きっかけ  
時・回数：とき、際、前、日、時間、日時、直前、たび、回数、頻度  
人：人、友達、友人、  
その他：約束、気、必要、つもり、権利、程度

#### 複合動詞

○会う＋動詞

#### 形容動詞

久しぶりに、頻繁に、久々に

#### 形容詞連用形

早く、早く～たい、

#### 副詞

初めて、実際、もう～ない、一度、一度も～ない、まだ～ない、ぜひ～たい、もう一度～たい、偶然、ばったり、必ず～ましょう、なかなか～会えない、次に～とき、再び、二度と～ない

コロケーションは動詞と結びつく「名詞＋格助詞」「名詞＋複合助詞」及び副詞、形容詞連用形、形容動詞などについて列挙する。

格は必須格、準必須格（例えば、「置く」の場合の二格）は必ず採録し、非必須格はその動詞に特徴的で、学習者が知っておいた方がいいと思われるもののみ採録する。例えば「咲



く」の必須格はガ格だけである。非必須格の中で「咲く」に特有のもので、学習者が知っておいた方がいいと思われるものにはニ格がある。動作動詞の場合はデ格が普通なのに対して、ニ格の場合は咲いた結果の場所を表すことから、ニ格が使われるのは特徴的と言える。さらにこの場合、ニ格だけを示すと、学習者はデ格は使わないのだと誤解しかねないので、デ格も並列して示した方がいい。「ハ、モ、ノ」については書かない。これらは「咲く」にとっても、また、どんな動詞にとっても特徴的ではない。

語義ごとに分けては書かない。例えば、「Nが走る」において「人が走る」と「亀裂が走る」では、「走る」の語義は異なるが、語義ごとに分けて共起語を書くことはせずに、まとめて書く。代わりに、コロケーションをカテゴリに分けて「人・動物」、「線」のようにラベルをつける。これにより、多義語の語義を明示的に分けて示すことはしなくとも、語義ごとに共起語をまとめて示すことになる。ただし、カテゴリの区分が難しいこともある。「学会で会う」というのは、場所か、状況かなどの判断は機械的にはできない。ケースバイケースで判断せざるを得ない。

共起語は頻度順に並べるのを原則とするが、実は最も利用価値が高いのは頻度が中程度のものであろう。学習者に必要な共起語を選ぶ必要がある。必要に応じて、頻度順ではなく、順番を変えることがある。学習者に何を知らしてもらいたいかという目線で、共起語とその用例をチェックする。例えば、「Nが会う」では、「～たち、二人、みなさん」は当たり前で、初中級の人でもすぐに思いつくだろうが、「～同士、お互い、両者」は中級の学習者でも、このような辞書を調べないと思いつかないかもしれない。こういうコロケーションが採録されていることが望まれる。このように高頻度でないものでも入れたいものもあるので、随時判断して入れる。頻度が高くてもあまりに冗長なものは随時判断して外す。例えば動詞「咲く」に花の名前が一般に共起するのであれば、花の名前を羅列するのではなく、「花の名前」としてまとめる。「Nが会う」の「私、人、あなた」も現段階では採録している。冗長か否かの判断が難しい場合がある。例えば、「Nから会う」に「私」は現れるが「人、あなた」は現れないので「Nから会う」の場合は「私」を採録するべきである。

「+名詞」の形で共起する名詞も採録する。「複合動詞」についても特徴的な共起語がある場合は採録する。

副詞については、できるだけ、呼応関係を補足する。呼応関係とは「ぜんぜん～ない」「ぜひ～たい」などである。

「その他」として、他で扱えないもの、例えば真正慣用句などを必要に応じて書く。動詞「会う」には該当するものがないが、動詞「売る」の記述の場合の「油を売る」などが該当する。

### 3.2 名詞が中心語である例

以下に名詞「愛情」を中心語とするコロケーションの記述例を示す。

表6 「愛情」の記述例

## 愛情

### +ガ+動詞

ある、伝わる、感じられる、冷める、足りない、なくなる、詰まっている、溢れている、深まる、こもった、湧いてくる、生まれる、減る、芽生える、育つ、にじみ出る、欠けている

### +ヲ+動詞

持って、注ぐ、感じる、受ける、かける、示す、求める、与える、込める、もらう、伝える、抱く、表現する、深める、育む、育てる、得られない、失う、向ける、取り戻す、信じる、感じ取る、確かめる、受け止める、寄せる、疑う、受け入れる、傾ける、独占する、押し付ける、実感する、否定する、独り占めする、奪われる、つなぎ留める、確かめ合う、裏切る

### +ニ+動詞

満ちている、溢れた、溢れている、包まれる、飢える、恵まれる、支えられる、基づく、気づく、満ち溢れた、満ち溢れている、変わる、欠ける、満たされた、応える、目覚める、溺れる、ほだされる

### +ガ+形容詞

ない、深い、強い、欲しい、薄い、少ない

### +ニ+形容詞

乏しい

### 形容詞+

深い、強い、温かい、優しい

### 形容動詞+

十分な、豊かな、純粋な、細やかな、異常な、

動詞を中心語とした例同様、頻度順に並べるのを原則とし、頻度が低いものでも必要に応じて採録する。MI、LD もチェックするのも動詞を中心語とした場合と同じ理由による。どの程度まで採録するかは、ケースバイケースになる。頻度が高くても、採らないものもある。

活用には注意が必要である。「愛情+ガ」の場合、受け身で「感じられる」の頻度が高い

ので、「感じる」ではなく、「感じられる」と記載する。なお、「愛情を感じる」の頻度も高いので、「愛情+ヲ」に「感じる」も記載する。他の例として「愛情が詰まる」よりも「愛情が詰まっている」が普通なので、「詰まる」を記載せず、「詰まっている」と記載する。「溢れている」「欠けている」も同様である。「愛情がこもる」、「愛情が湧く」という終止形よりも「愛情がこもった」「愛情が湧いてくる」の方が自然であるので「愛情+ガ」に「こもった」、「湧いてくる」も、それぞれ記載する。

#### 4. さいごに

以上、現在進行中の学習者向けコロケーション辞書に採録するためのコロケーションについて、その定義と採集方法について述べた。採集方法及び採録の手順や記載方法などについて今後も検討を加えながら、充実した辞書となることを目指したい。

#### 注

1) 本稿の分類は Cowie (1998)をまとめた石川(2008)を参考に行っているが、Cowie が比喩的イディオム(*figurative idiom*)と呼んでいるものを比喩的慣用句、純粋イディオム(*pure idiom*)と呼んでいるものを慣用句と読み替える。

#### 参考文献

Cowie, A. (1998) *Phraseology: Theory, Analysis, and Applications*. Oxford: Oxford University Press.

NLT (NINJAL-LWP for Tsukuba Web Corpus) <http://corpus.tsukuba.ac.jp/>

Sinclair, J. (1991). *Corpus Concordance Collocation*. Oxford: Oxford University Press

石川 慎一郎(2006)「言語コーパスからのコロケーション検出の手法ー基礎的統計値についてー」統計数理研究所共同研究レポート, 190, 1-28.

[http://language.sakura.ne.jp/s/ilaa/ishikawa\\_20060328.pdf](http://language.sakura.ne.jp/s/ilaa/ishikawa_20060328.pdf)

(2013.10.20 アクセス)

石川 慎一郎(2008)「コロケーションの強度をどう測るかーダイス係数, t スコア, 相互情報量を中心としてー」言語処理学会第 14 回大会チュートリアル資料, 40-50.

[http://language.sakura.ne.jp/s/ilaa/ishikawa\\_20080317.pdf](http://language.sakura.ne.jp/s/ilaa/ishikawa_20080317.pdf) (2013.10.20 アクセス)

小野正樹・小林典子・長谷川守寿 (2009/2010)『コロケーションで増やす表現ーほんきの日本語』Vol.1/Vol.2, くろしお出版